厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）
（総合）分担研究報告書

拠点病院集中型から地域連携を重視したHIV診療体制の構築を目標にした研究

研究分担課題　高齢者福祉施設におけるHIV感染者受け入れに関する教育啓発活動についての調査

研究代表者　猪狩 英俊　千葉大学医学部附属病院・感染制御部長　准教授

研究協力者　柴田幸治　千葉感染制御研究所　所長

研究要旨

HIV の感染症患者の高齢化が指摘されている。本研究では、介護・看取りなどの役割を担う、高齢者施設における HIV 感染症患者の受け入れについての教育啓発活動について調査を行った。

HIV 感染症に対する理解が、1980 年から 90 年代前半までの情報のままで、更新されていないことが判った。偏見、誤解、不安など、非科学的な部分で、HIV 感染症患者の受け入れが判断されていることが見え隠れする調査結果である。

高齢者施設への受け入れ促進するためには、積極的に施設に対して HIV 感染症について情報提供することが重要であることが判った。

HIV 感染症患者の受け入れの決定権については興味深い結果になった。管理者は職員、職員は管理者というように、多職種への丸投げ状態が判明した。結果的に受け入れが進まない組織体制になっている。

HIV 感染症に特定せず、施設内の感染対策は不可欠である。このようなプロセスを経て、感染対策が一定レベルに達した施設づくりを行うことが重要である。

A．研究目的

HIV 感染症患者の受診動向を把握する。全国的に HIV 感染症患者の高齢化が進行している。2019 年、千葉大学医学部附属病院に通院する患者(315 人)では 50 歳以上の患者が占める割合は 40%を超過した。千葉県健康福祉部疾病対策課の県域調査(2018)では、1441 人の HIV 感染症患者がおり、40 歳以上は 52.9%、50 歳以上は 17.6%という結果であった。地域間の格差があると考えられる。しかし、全国的な動向を踏まえ、HIV 患者の高齢化を想定した診療体制を構築する必要がある。

しかし、高齢化した HIV 感染症患者が高齢者施設への入所を希望しても、様々な障壁が存在し、受け入れ施設を探すことに困難が生じている。

千葉大学医学部附属病院では、千葉県からの委託事業で「千葉県 HIV 拠点病院会議」を運営している。千葉県内のエイズ拠点病院から、HIV 感染症診療に従事する医師、歯科医師、薬剤師、看護師、ソーシャルワーカー、臨床心理士などの多職種が参加している。教育啓発活動に加えて、臨床上の様々な問題を共有し、解決策を議論する組織である。

高齢者施設への受け入れ促進するための課題として、「医療側からの強い依頼や説明だけでなく、時に施設向けの研修の場を設け、十分な説明を行う事で、理解が得られたという経験」について報告があったことを受けて、「今まで医療側から積極的に施設に対して HIV 感染症のことについてアナウンスしてこなかったという反省」があがった。

しかし、現実には「HIV 陽性者の受け入れについて…」の研修会を企画しても、一番聞いてほしい人たちが、初めから参加しない恐れがあった。そこで、様々な研修企画の中に「HIV 感染症と高齢者施設」という講演を盛り込み、HIV 感染症の受け入れに関しての質問紙調査を実施した。

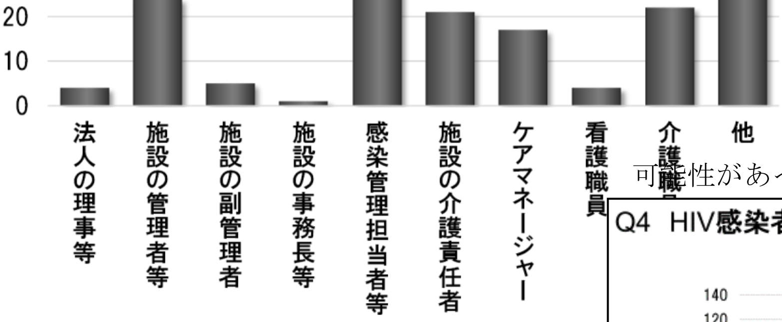
。

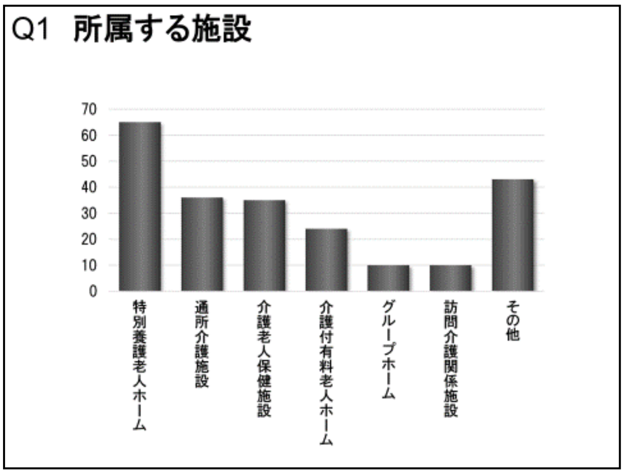
B．研究方法

保健所で実施する教育研修会、施設からの要請で開催する感染症講習会で、「HIV 感染症と高齢者施設」をテーマに研修を実施した。実施後に、質問紙調査を行い、HIV 感染症患者の受け入れの課題を分析した。

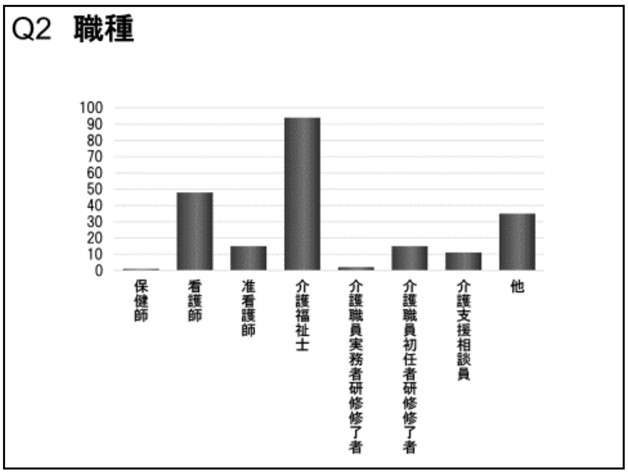
研修会は、2018 年 10 月～2019 年 9 月で 5 回開催し、回答者は 223 名であった。

C．　研究結果

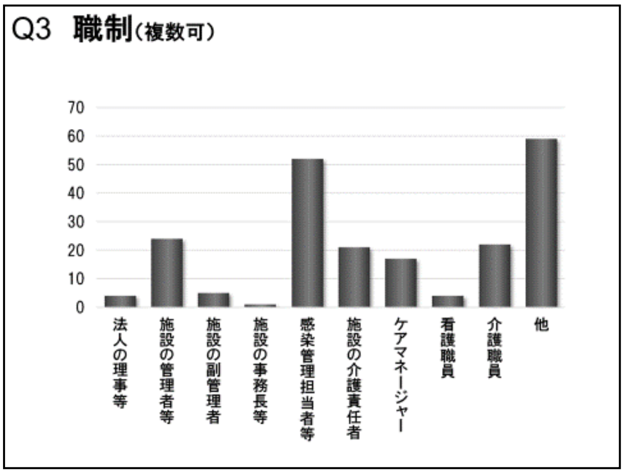




Q1 所属する施設



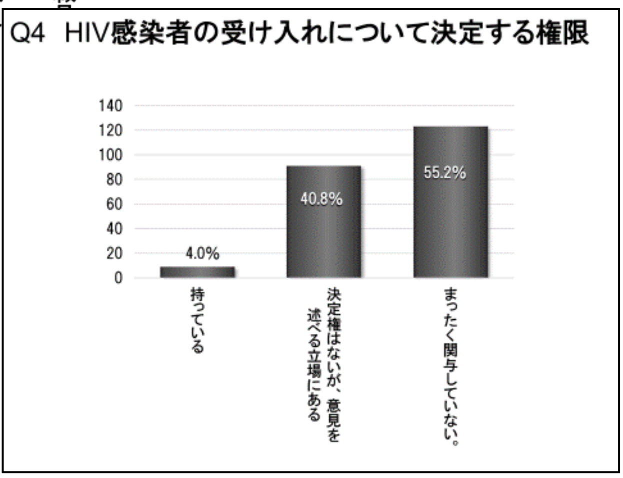
Q2 職種



Q3 職制（複数可）

2. HIV 感染者の受け入れについて決定する権限(Q4)

HIV 感染者の受け入れについての権限を持っていると回答があったのは 4%であった。決定権はないが、意見を述べる立場にあると回答があったのは 40%であった。この人たちの意見が、HIV 感染症患者の受け入れを左右する可能性があった。



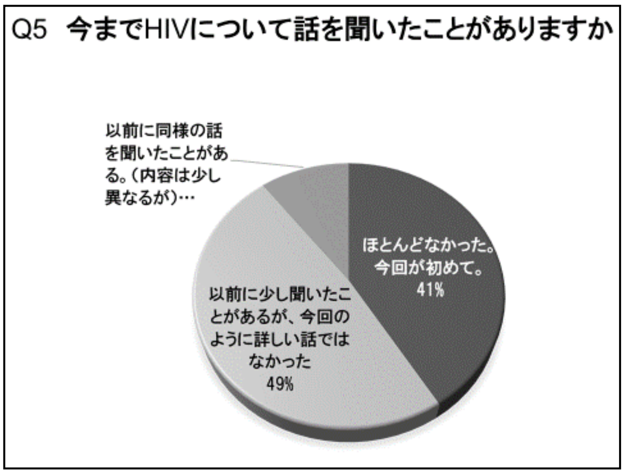
Q4 HIV感染者の受け入れについて決定する権限

3. 今までHIVについて話を聞いたことがありますか(Q5)

ほとんどなかった、今回が初めてと回答したのが 41%

以前に少し聞いたが、今回のように詳しい話ではなかった 49%

となり、HIV 感染症に関する、教育啓発活動を展開する余地が相当あることが判った。



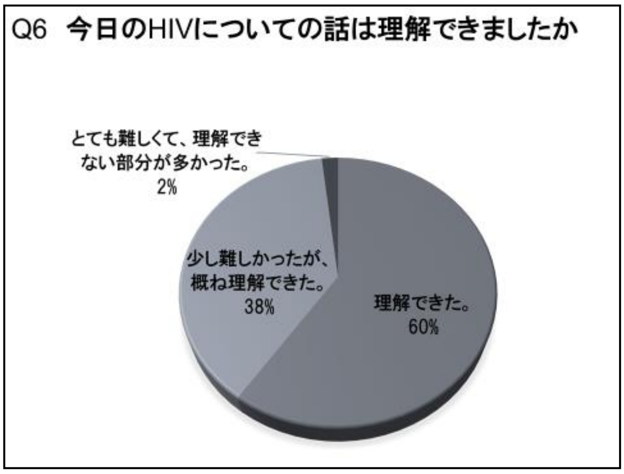
Q5 今までHIVについて話を聞いたことがありますか

4. 今日のHIVについての話は理解できましたか(Q6)

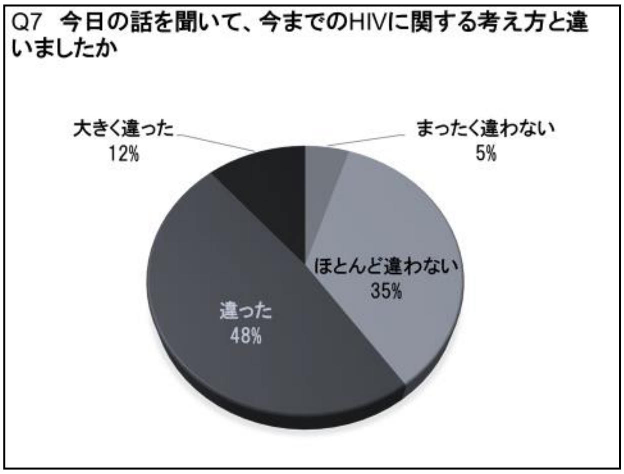
・理解できた　60%

・少しむずかしかったが、概ね理解できた 38%

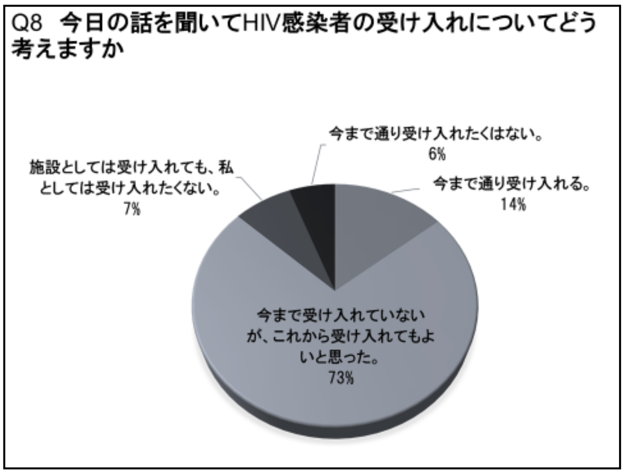
となり、適正な内容の講習であった。



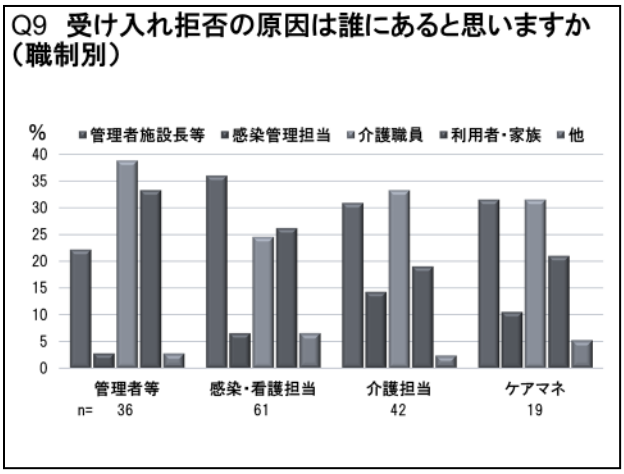
5. 今日の話を聞いて、今までのHIVに関する考え方と違いましたか(Q7)
違った、大きく違ったと回答したのが 60%であった。教育啓発活動の重要性が示された。その一方で、まったく違わない、ほとんど違わないという回答も 40%になり、教育啓発活動の内容についても検討の余地があることが判った。



6. 今日の話を聞いてHIV感染者の受け入れについてどう考えますか(Q8)
受け入れに前向き回答が 87%になった。



7. 受け入れ拒否の原因は誰にあると思いますか (職制別)(Q9)
棒グラフが複雑になるが、管理者は職員に、職員は管理者に原因があるという傾向が見られた。



D. 考察

高齢者施設でのHIV感染症患者の受け入れについて分析した。

HIV感染症に対する理解が、1980年から90年代前半までの情報のままで、更新されていないことが判った。偏見、誤解、不安など、非科学的な部分で、HIV感染症患者の受け入れが判断されていることが見え隠れする調査結果である。

高齢者施設への受け入れ促進するためには、積極的に施設に対してHIV感染症について情報提供することが重要であることが判った。

講習時間は 30 分程度のものであるが、この 40 年間のHIV感染症の知見を盛り込んでいった。深堀して説明することはできなかった部分もある。適正な対策をとることで、HIV 感染のリスクは相当に軽減されること、日常生活では感染しないこと、を説明した。

こうした教育啓発活動をとおして、HIV 感染症に対する理解が進んだことは、今後の活動に対しても自信をもつことができた。

HIV 感染症患者の受け入れの決定権については興味深い結果になった。管理者は職員、職員は管理者というように、多職種への丸投げ状態が判明した。結果的に受け入れが進まない組織体制になっている。

HIV 感染症に特定せず、施設内の感染対策は不可欠である。今回の新型コロナウイルス感染症でも、高齢者施設でのクラスター発生が多く見られ

た。感染症に対する正しい理解と、適切な感染対策を講じることが急務である。

このようなプロセスを経て、感染対策が一定レベルに達した施設づくりを行うことが重要である。

E．結論

高齢者施設での HIV 感染症の受け入れを促進するには、教育啓発活動が重要である。

F．健康危険情報

本研究では介入研究ではないため特記すべき健康危険情報はありません。

G．研究発表

1　論文発表

なし

2　学会発表

柴田幸治、猪狩英俊　高齢者福祉施設における HIV 感染者受け入れに関する調査　第 34 回日本エイズ学会

H．知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3.その他

なし